

適の情を託した作品が多くなっているというのが筆者の解釈である。

注

- ① 『東瀛詩選』の引用する『梅墩詩鈔』の序文は、現行のものと異同がある。
- ② 『梅墩詩鈔』二編卷一所収。
- ③ 『梅墩詩鈔』三編卷一所収。
- ④ 『梅墩詩鈔』三編卷一所収。
- ⑤ 『梅墩詩鈔』三編卷一所収。
- ⑥ 『梅墩詩鈔』三編卷二所収。
- ⑦ 『梅墩詩鈔』四編卷二所収。
- ⑧ 『梅墩詩鈔』四編卷一所収。
- ⑨ 『梅墩詩鈔』四編卷二所収。
- ⑩ 『梅墩詩鈔』四編卷一所収。
- ⑪ 『梅墩詩鈔』三編卷二所収。
- ⑫ 『梅墩詩鈔』四編卷一所収。
- ⑬ 「兪越と『東瀛詩選』」蔡毅著（島根大学法文学部紀要 一九九六年）に、『東瀛詩選』の選詩に関して言及している。

以上の旭荘の著書その他のなかで、旭荘の浪華での生活と関係があるのは、まず『日間瑣事備忘録』であろう。天保七年から始まった三回にわたる浪華の生活、通算二十年以上になるが、その七十パーセントが浪華の日記なのである。『九桂草堂筆記』もまた旭荘の三度目の浪華在住、淡路町御霊西入から転居した伏見町の住居、自ら「九桂草堂」と名づけた所で安政二年に刊行したもので内容はさききのべたように多方面にわたる。『梅墩詩鈔』、『梅墩遺稿』は旭荘の生涯の詩作の集大成であるが、三編巻一から巻二くらいまでが、第一回の堺及び第二回の西横堀に始まる五年の間の作であり、四編巻一の十首目くらいから以降の大半は浪華での作ということになる。嘉永五年(四十六歳)までなので、嘉永六年(文久三年(旭荘四十七歳)五十七歳)の作は後者の『梅墩遺稿』によって補われる。

旭荘の浪華での生活を知るための資料は、以上挙げた四種に大体絞ることができよう。またこの四種を対照した照合することで、浪華での塾の講授者、詩文の創作者、また私人としての旭荘といったさまざまな面を解明することができるのではないかと考えている。

それに加うるに、清の大儒兪越の『東瀛詩選』の旭荘に対する評価と兪越の選んだ一七一首の旭荘の詩については、浪華在住の作に対する評価は結果として全く低いのだが、先に述べたようになお再考の余地があるかに思う。注⑬

○

旭荘の浪華在住は三回を数えるが、それぞれの時期に於ける旭荘を取り巻く環境はかなり差があった。四十年代前半までの旭荘の作品には兪越の評価に値するものであるが、四十年代後半はそうした作品は極めて少なくなっている。健康状態の悪化とそれに由来する創作意欲の衰えが原因だと言われており、『梅墩詩鈔』では四編以降のものなのだが、才気横溢、変幻百出ではないが、趣向を変えた作品が多く、長編大作よりも定型の詩にいわば関

嘉永六年（文久三年（旭荘四十七歳）五十七歳）の作。「広瀬旭荘伝」亀谷省軒。

※『梅墩詩鈔』『梅墩遺稿』をあわせれば、旭荘の詩は一四一二首を数える。

五、『旭荘文稿』三巻 嘉永五（一八五二）年刊。

六、『明史小批』二巻 文政八（一八二五）年、旭荘一九歳の著。『明史』に対する論評。

七、『塗説』二巻 天保七（一八三六）年淡窓の跋。旭荘の経説・政論・雑話等の随筆集。 天保四（一八三三）

年、旭荘口授、門人僧純・藤正節筆録。

八、『梅敦漫筆』一巻 和漢の歴史を中心とした随想・随筆。

九、『病榻芸語』一巻 怪談集。天保三（一八三二）年冬の著。

一〇、『追思録』一冊 弘化元（一八四四）年、江戸で病没した愛妻合原松子への追悼書。

一一、『梅敦叢書』二巻 政治・教育に関する意見や議論のうち、仮名書の文献一〇種を収録。

などが主なものである。現在これらはすべて

I、『広瀬旭荘全集』全十二巻・別巻一冊（影印）中村幸彦主編 思文閣出版（一九七五年）に収められている（未刊）。

また

II、『梅敦詩鈔』全四編一二巻、『梅墩遺稿』二巻（『詩集・日本漢詩』第十一巻、影印）富士川英郎等編 汲古書院（一九八七年）

も出ているが、『広瀬旭荘全集』は、大分日田の広瀬資料館先賢文庫蔵本を底本としており、IIの汲古書院の影印は、それぞれ慶応義塾大学斯道文庫本、富士川英郎蔵本を底本としている。

なお広瀬淡窓・旭荘兄弟の資料を保存する広瀬資料館は、蔵書について『広瀬先賢文庫目録』（広瀬貞雄監修、中村幸彦・井上敏幸共編、平成七年十二月）を出しているが、目録には記載されていない未整理の膨大な量の資料がまだ残されており、整理の続行と公開の日が待たれる。

○広瀬旭荘の著書

次に旭荘が生涯の間に著した著書について述べておこうと思う。旭荘が五十七年の生涯の間に残した著書は、文集・詩集・随筆、また書簡に至るまでを含めるならば膨大な量である。その主なものを次に記し、旭荘の浪華での生活と関係のあるものについて言及しておきたい。

一、『日間瑣事備忘録』前編一二冊・後編五四冊。

天保三(一八三二)年六月一日(二十六歳)〜文久三(一八六三)年八月十三日(五十七歳)、死ぬ五日前までの三十一年間の日記。自筆の部分もあるが大半は口述筆記(漢文)。

二、『九桂草堂筆記』十卷。

安政二(一八五五)年、旭荘口授、門人長光太郎(三州)筆録、長男幸之助(林外)校正。経史・詩文・評論・天文・地理・考古・回想などの随筆。

三、『梅敦詩鈔』四編一二卷(初・二・三編は嘉永元年、四編は安政三年刊。全所収詩一一八一首)

◎初編三卷 坪井信良・伊東子厚 編集校訂 (二五三首)

弘化四年七月 篠崎小竹序、弘化五年七月 坪井信良跋

◎二編三卷 校訂者は初編に同じ (二一七首)

弘化五年 篠崎小竹序、嘉永元年 安積良齋序

◎三編三卷 校訂者は初編に同じ (二四八首)

嘉永元年七月 大槻磐溪序 林藕黄跋

◎四編三卷 劉君平・柴東野 編集校訂 (三六三首)

嘉永五年 草場佩川・斎藤拙堂序 嘉永三年 筑井清跋

四、『梅敦遺稿』上下二卷 門人光吉文編。(明治四十三年排印) (二三一首)

九月二十二日夜三更雨止歩肥後橋上 注⑪

九月二十二日夜、三更雨止み、肥後橋の上を歩む

雨歇秋宵忽暖天 雨歇み 秋宵 忽ち暖天

也乘残醉歩橋辺 也た残酔に乗じて 橋の辺りを歩む

雲埋列樹疑無岸 雲 列樹を埋め 岸無きかと疑う

灯点中流知有船 灯 中流に点じて 船あるを知る

杳渺希音孤鶴喚 杳渺たり希音 孤鶴喚び

蕭岑静味万家眠 蕭岑たる静味 万家眠る

昼間鞞擊肩摩地 昼間 鞞擊肩摩の地

恍訝身生太古先 恍訝す 身は太古の先に生ぜしかと

昼間は人で混み合う雑踏の場所が、鶴の鳴き声が時に聞こえるほかは、寝静まりかえって太古の時代かと疑われる静かな情景を叙している。また、五年後に旭莊が三度目の最終の浪華在住の折りにも肥後橋を詠じた五言絶句がある。当時の住まいは淡路町御霊西入であった。

肥後橋即事 肥後橋の即事 注⑫

估人侵曉集 估人 曉を侵して集い

霜色燦平橋 霜色 平橋に燦く

不待朝陽出 朝陽の出るを待たずして

万鞋全踏消 万鞋 全らく踏消す

嘉永三（一八四六）年の末の作。早曉をおして集う商人たち、肥後橋に降りた燦々と輝く霜が、朝日の昇る前、陽光ではなく商人たちの履き物によって、完全に踏み消されてしまう様子を描写する。「即事」とあるゆえ、目前の実景をそのまま詩にしたのであろう。

渡錢討去滿船堆 渡錢討め去りて 滿船に堆し

難尋當日輿梁跡 尋ね難し 當日輿梁の跡

但見輕篙頻往來 但だ見る 輕篙の頻りに往來するを

大貳村王仁墓 大貳村の王仁の墓

墓勢陵遲圃一隅 墓勢 陵遲として 圃の一隅に

梅花枯盡草荒蕪 梅花 枯れ尽きて 草 荒蕪

却看今日斯文盛 却って看る 今日 斯文の盛んなるを

蕉叟遺碑無處無 蕉叟の遺碑 処として無きは無し

七言絶句十九首の連作である。今宮蛭子・今宮・阿倍野・無尻川・天満菜市・高津宮・心齋橋・道修町・順慶街・中之島・永代浜・堂島・木津・四つ橋・玉江橋・天保山・長柄川・王仁の墓の十九カ所、今は町名の消えたようだが、十九首しか残っていない。詩の排列にも規則性が見いだせないし、市内といっても一日で歩いて回れる距離ではない。市内散策の都度に詠んだ詩を後に編集して、「浪華雜詩二十五首」としたのではなからうかと推察している。王仁の墓は別の機会があったようである。

「浪華雜詩十九首」のなかには、川・橋を詠じた詩が五首ほどある。無尻川・安治川・長柄川、四つ橋・玉江橋などである。また繁華街に興味があったようで、蛭子神社祭・天満菜市・心齋街・道修町・順慶街夜市・中之島・永代浜乾魚市・堂島米市など当時も今も大阪の商業の中心地である。その他の詩にも、淀川・中津川や肥後橋を詠んだ詩がある。

例えば次の肥後橋の詩は、旭荘の二度目の浪華在住のときの詩だが、天保十二(一八四一)年秋、西横堀西国橋に住んでいた。晩秋九月の二十二日の三更、真夜中の雨が止んだころ、ほろ酔い気分で肥後橋をぶらつきつつの作である。詩にある「中流」は土佐堀川で、向かいの中之島に渡る、淀屋橋の西側の橋である。

一市新開傍水濱

一市新たに開く 水濱の傍に

劇場幾處客如雲

劇場 幾處か 客 雲の如し

橋頭月落觀方畢

橋頭に月落ちて 觀 方に畢わり

展響東西南北分

展響 東西南北に分かつ

玉江橋

玉江橋

川形唯道向西通

川形 唯だ西に向かつて通ず

地勢誰圖稍不同

地勢 誰か図る 稍や同じからず

直認天王寺高塔

直だに認む 天王寺の高塔

始知橋路指南東

始めて知る 橋路南東を指すを

安治川

安治川

治水至今良策稀

治水 今に至るも良策稀なり

海門舟屢觸危機

海門 舟 屢しば危機に触れ

新田日關川形變

新田 日びに關きて 川形変わる

欲作河翁論是非

河翁 是非を論ずるを作さんと欲す

天保山

天保山

海勢北廻灣又灣

海勢 北に廻れば 灣又た灣

東南望豁紀泉間

東南の望豁 紀泉の間

西風忽送千帆影

西風 忽ち千帆の影を送り

長柄川

長柄川

舟子招招立水隈

舟子 招招 水隈に立ち

中島晚眺

幕匝船窓大鼓鳴  
百夫搖櫓溯江行  
方知西國諸侯至  
倉邸門開列炬明

永代濱乾魚市

萬石腐魚堆路隅  
瘠田播去變膏腴  
未知海鼠有何効  
纔遇西人貴似珠

堂島米市

分曹糶糶競輸贏  
一擲千金似羽輕  
食貨大權歸賈豎  
何人復唱古常平

木津村

枳籬相接野翁居  
不業耕耘與釣漁  
却致中人十家産  
方池尋丈養金魚

四橋

中島の晚眺

幕は船窓に匝らして 大鼓鳴り  
百夫 櫓を揺かして 江を溯りて行く  
方を知る 西國の諸侯の至るを  
倉邸 門開きて 列炬明らかなり

永代浜の乾魚市

万石の腐魚 路隅に堆く  
瘠田に播き去りて 膏腴に変わる  
未だ知らず 海鼠 何の効あらんかと  
纔かに西人に遇えば 珠の如くに貴ぶ

堂島の米市

曹を分かちて糶糶 輸贏を競う  
一擲の千金 羽の輕きに似たり  
食貨の大権 賈豎に帰す  
何人か 復た唱う 古常平

木津村

枳籬相接す 野翁の居  
耕耘と釣漁とを業とせざるも  
却って 中人十家の産を致す  
方池 尋丈 金魚を養う

四橋



九月龍孫十月瓜

高津看雪

夙識仁皇民竈歌  
千年遺跡此經過  
今朝三十萬家雪  
轉比當時烟影多

心齋橋

架上清風走蠹魚  
牙籤萬卷每家儲  
孰爲陳起孰毛晉  
近日書林亦讀書

道修町

列肆比簷皆藥商  
麝檀狼藉曬街傍  
衣裳自怪經過後  
惹得荀君坐處香

順慶街の夜市

飛埃映燭夜成霞  
隔水新街是妓家  
凡卉常蔬空具列  
渡橋人買玉簪花

九月の竜孫 十月の瓜

高津にて雪を見る

夙に識る 仁皇の民の竈の歌  
千年の遺跡 此に經過す  
今朝 三十万家の雪  
転た 當時の烟影に比すれば多し

心齋橋

架上の清風 蠹魚を走らせ  
牙籤 万卷 每家に儲う  
孰か陳起たり 孰か毛晋たらん  
近日の書林 亦た書を読む

道修町

列肆 比簷 皆薬商  
麝檀 狼藉 街傍に晒せり  
衣裳自ら怪しむ 經過の後  
惹かれ得たり 荀君の坐処の香しきに

順慶街の夜市

飛埃 灯に映じて 夜 霞と成る  
水を隔つ新街 是れ妓家  
凡卉 常蔬 空しく具列し  
橋を渡りて 人 玉簪花をかう

生平不解世人算  
擲我真金買假金

今宮春望

東岡一帶幽間地  
返照蒼茫烟霞媚  
多少樓臺春樹間  
塔尖獨認天王寺

阿部野

興亡千古泣英雄  
虎鬪龍爭夢已空  
欲問南朝忠義墓  
薔花秋仆野田風

無尻川

遠山西隱寒雲繞  
孤鶴南飛秋色杳  
夾水兩行紅樹間  
釣鯊舟過知多少

天満菜市

世習滔滔趨侈奢  
嘗新薦異競相誇  
詩人欲賦苦無例

生平解せず 世人の算  
我が真金を擲ちて 仮金を買う

今宮の春望

東岡の一帶 幽間の地  
返照 蒼茫 烟霞媚ぶ  
多少の楼台 春樹の間  
塔尖 独り認る 天王寺

阿部野

興亡千古 英雄泣き  
虎鬪 竜争 夢已に空し  
問わんと欲す 南朝忠義の墓  
薔花 秋に仆る野田の風

無尻川

遠山 西に隠れ 寒雲繞る  
孤鶴 南に飛んで 秋色杳し  
水を夾む 兩行紅樹の間  
釣鯊の舟過ぐるごと 知る多少

天満の菜市

世の習い 滔滔として侈奢に趨る  
新を嘗め 異を薦めて 競いて相誇る  
詩人賦さんと欲するも 例無きに苦しむ

停杯瞰天雲 花命幾回診

杯を停めて天雲を瞰す、花命 幾回か診る

預愁風雨過 容易芳妍殞

預愁 風雨過ぎ、容易にして 芳妍の殞わるるを

休道有来朝 今宵酒須尽

道うを休めよ 来朝ありと、今宵 酒須らく尽くすべし

嘉永二（一八四九）年三月十六日、四十三歳の時に詠んだ詩。淡路町に住んで二年あまり、満開の桜のもとで塾生九人を招いて飲み「遇物尽欣欣、愛春非独我」の十字を韻として分かち、旭莊を入れて十人が詩を作り、旭莊は三字目の「尽」の字が韻となったという。狭い庭に太陽が昇り、春の陽気に誘われて鳥が鳴き花が満開となった、と晩春三月半ばの花見の宴を開いたきっかけを述べ、次いで宴の状況を叙していく。塾生九人を集めての酒宴の席は粗末なものだが、要は形より心情が大切だと、乏しい料理を分け合ってはかない花の命を氣遣い、明日があるなどと言わずに、今宵の花を酒を樂しもう、とのどかではあるが花の命の短さを嘆じている。最後の二句は、魏の武帝の「短歌行」の「酒に対えば当に歌うべし、人生幾何ぞ」の詩の句の心情に通ずるものがある。塾生を得て春には花見の宴を開き、全員で詩を作る。旭莊の安定した生活をうかがわせるが、春愁に似た寂寞の情が漂うていることは否定できない。

次に同じ所に住んでいたときの連作の詩を挙げる。前の詩の前年、嘉永元（一八四八）年の作であるが、すべての詩が同時の作であるかどうかについては疑問がある。

浪華雜詩十九首 原二十五首 注⑩

正月十日觀蛭子神祭 正月十日、蛭子神祭を觀る

求福何須懇禱深 福を求むるに何ぞ懇禱の深きを須いん

惘然唯合絶貪心 惘然として 唯だ合に貪心を絶つべし

得尽字。注⑨

淡巷の僑居、庭広僅かに尋丈。三月既望、桜花盛んに開き、門生九人を招きて飲む。物に遇うて尽く  
欣欣、春を愛するは独り我のみにあらずの十字を分かちて韻と為す。余 尽の字を得たり。

高墻城四隣 庭隘草木窘

高墻 四隣を域す、庭隘くして 草木窘なり、

欲請東君臨 亦恐逢渠晒

東君の臨を請わんと欲して、亦た渠の晒いに逢うことを恐る

心念口未言 何凶忽見允

心に念ず 口未だ言わざるも、何を凶りて 忽ち允を見る

告晴禽氣揚 報春花意敏

晴を告ぐに 禽の氣揚がり、春を報ずに 花の意敏し

不遑致遠賓 門生数輩引

遠賓を致すに遑あらず、門生 数輩引くに

寒厨絶腥鮮 新鮓带蔬筍

寒厨 腥鮮絶ゆ、新鮓 蔬筍を帯び

淡泊吾已安 粗糲君且忍

淡泊 吾已に安んず、粗糲 君且に忍びんや

要使飲情融 不用礼数緊

飲情をして融かしむるを要す、礼数の緊なるを用いず

一皿数箸争 半羹衆吻吮

一皿 数箸争い、半羹衆吻吮る

第三回の浪華在住は、弘化三年（一八四六）八月のことであり、江戸での三年の生活を経て、浪華にもどって来たのであった。そのときに詠んだ詩がある。

再住浪華作 再び浪華に住むの作 注⑧

此地重来似返郷 此の地 重ねて来るは郷に返るに似たり

同人各各故情長 同人 各おの故情長く

唯憐一事不如旧 唯だ憐れむ 一事旧に如かざるを

兒在西州妻北郎 兒は西州に 妻は北郎に在り

正確に言えば、「再び」ではなく「三たび」であるが、当初は豊後府内藩の蔵屋敷に住み、一ヶ月ほど後に淡路町御霊西入に移転し、八年あまり住んでいた。旭荘の浪華在住の場所として最も長期間にわたる。現在は大阪の北区であるが、今も製薬会社が密集する大阪の商業中心地のすぐ近くである。初回の泉州堺、二度目の西横堀や高麗橋での家族とともに生活した五年間、これまでの七年ほどの浪華生活は、旭荘にとって日田が第一の故郷とすれば、浪華はすでに第二の故郷とも言える馴染みの土地になっていた。

一句二句は旭荘のそうした心情を率直に表している。ただ第二回の時とは全く異なる事情の変化が旭荘の身に起こっていた。江戸での三年の間に、十二年間続いた二度目の妻まつが死亡したことであった。このことが旭荘に与えた打撃は測り知れぬものがあり、以後の旭荘の人生の屈折に大きく関わるものがあつたことを感じさせる。詩の後半「唯だ憐れむ一事旧に如かざるを、兒は西州に妻は北郎に在り」は、旭荘の痛切な悲哀の情に満ちている。また「追思録」一編は、妻まつに捧げた哀悼の辞、悼亡の辞である。

八年あまり住んだ淡路町で旭荘が開いた塾の様子を詠んだ詩がある。

淡巷僑居、庭広僅尋丈。三月既望、桜花盛開、招門生九人飲。分遇物尽欣欣、愛春非独我十字為韻。余

島に群れる鳥であらう。

与香川井坂野村諸子納涼浪華橋下 注⑥

香川井坂野村諸子と浪華橋の下にて納涼

赫赫炎炎氣 赫赫 炎炎の氣

此時安在哉 此の時 安くにか在らんや

輕雷天際度 輕雷 天際に度り

踈雨月中来 踈雨 月中に来たる

我輩吟哦苦 我輩 吟哦苦しみ

隣舟鼓笛催 隣舟 鼓笛催す

他人已歸後 他人 已に歸りて後

移棹更沿洄 棹を移して 更に沿洄す

この詩は前の二首の翌年の夏、詩友と納涼にかけた時の作である。空に雷が鳴りにわか雨に会い、詩がなかでできず、ひとり舟をもう一度沿洄させた、という叙事的な詩である。土佐堀川であろうか。ちなみに浪華橋の夕涼みは画題にもなっていたようで、名所図絵にも数えられていたようである。この詩は第三回の浪華在住の時の作である。

題浪華橋納涼図 浪華橋の納涼の図に題す 注⑦

川濶風分路 川濶くして 風 路を分け

舟行月亦波 舟行くに 月亦た波

遊人屢移棹 遊人 屢しば棹を移し

何処得涼多 何処にか 涼を得ること多からん

中秋 舟を浪華橋の下に浮かべ、西州の故人を懐う

去歳中秋臥病牀 去歳 中秋 病牀に臥し

空将薬餌換杯觴 空しく薬餌を将って 杯觴に換う

吾身暗喜今年健 吾が身 暗かに喜ぶ 今年健なるを

月色明於昨夜光 月色 昨夜の光よりも明らかなり

疎柳遮舟隠釵影 疎柳 舟を遮って 釵影を隠し

輕風度水通衣香 輕風 水を度って 衣香を通う

更深遠電西南見 更深けて 遠電 西南に見ゆ

也恐雲陰在故郷 也た恐る 雲陰 故郷に在らんかと

前年の中秋には病のため酒も飲めなかったのが、健康な今年の中秋の月光はひとときわ明ると、心情の違いを述べるが、西南の方に雷電を見て雲が月光を曇らせているのではないかと故郷の日田に思いを馳せる。

浪華橋賞月者過三更皆去余独留至曉 注⑤

浪華橋に月を賞する者、三更を過ぎて皆去り、余独り留まりて曉に至る

橋上憧憧万人行 橋上 憧憧として 万人行く

橋下簇簇千舟横 橋下 簇簇として 千舟横たわる

稍到三更皆散去 稍く三更に到り 皆散り去る

誰看落月揺情処 誰か看ん 落月 情を揺がす処

露白風清無限思 露白く風清くして 限り無き思

唯有沙禽与我知 唯だ 沙禽と我と知るあり

七言六句で、三更つまり夜中の十二時を過ぎて、橋上の万人も橋下の千舟も皆去ってしまい、落ちゆく月を眺める無限の思いを共有するのは、沙禽と自分だけだと、名月観賞後の寂寞たる思いをうたっている。沙禽は中之

絶嶺勝概旧曾聞 絶嶺 勝概 旧と曾て聞く

此日振衣倚夕曛 此の日 衣を振るいて 夕曛に倚る

一簣成山人力大 一簣 山と成る 人力大なり

孤飛踰海鳥心勤 孤飛 海を踰え 鳥心勤む

風生極浦帆形仄 風は極浦に生じ 帆形仄かなり

春入遙峰燒跡分 春は遙峰に入って 燒跡分かる

幾歳西州帰不得 幾歳か 西州帰るを得ず

崦嵫望断万重雲 崦嵫 望み断ゆ 万重の雲

この詩は、天保十(一八三九)年春の作であり、今回の浪華在住では三度目の呉羽橋東南町橋に住んでいた。

現在の港区、安治川に面しており大阪湾を一望できるが、日本で最も低い山としても有名である。夕暮れの天保山の風景を詠んだものだが、冒頭の「絶嶺勝概」また三句の「一簣 山と成る 人力大なり」は、確かに人工の山だが「絶嶺」といえるかどうか迷う。故郷日田からの再度の浪華来訪はまだ一年を経れておらず、「幾歳か西州帰るを得ず」ではない。旭荘の深層心理的年数なのであろうか。なお天保山を詠んだ詩は後にももう一首ある。

次の三首は浪華橋を詠んだ詩だが、なぜか浪華橋を詠んだ詩が他にもある。地理的に近かったせいもあるが、特に惹かれる理由があったのかも知れない。前の二首は天保十一(一八四〇)年の八月十五日、中秋の日のものであり、住まいは四度目の高麗橋四軒街、後の一首は翌十二(一八四一)年夏、住まいは五度目の西横堀西国橋であり、天保十(一八三九)年五月には、日田から妻まつ長男孝之助を迎えてともに暮らしていた。浪華橋は現在の中央区、北浜のもと大阪証券取引所から中之島をはさんで流れる土佐堀川、堂島川を経て天満の方へかかる橋である。ここから西の方へは当時全国の諸藩の蔵屋敷が建ち並び、荷を積んで川を上下する舟で賑わった場所で、旭荘は特にこの付近の経済的繁栄に強い関心を持っていたようである。

中秋浮舟浪華橋下懷西州故人 注④



三旬無疾倚医門

三旬 疾無くして 医門に倚る

鳩棲茂樹新巢穩

鳩は茂樹に棲み 新巢穩やかなり

燕集空梁旧墨存

燕は空梁に集いて 旧墨存し

笑倒残瓢侑諸仏

笑いて残瓢を倒にして 諸仏に侑む

对君勝与俗賓言

君に対すれば 俗賓と言るに勝る

初めて浪華に來た旭莊にとって、同郷の人安石の厚情は有り難かったにちがいない。客心の身が故郷と同じ思いにさせてくれたという。七月七日仏縁があるわけではないのに専修寺にやってきましたが、三旬、一ヶ月間病人では無いのに医師の家に身を寄せていた。前半は安石への感謝の念と転宅をユーモラスに表現、後半は寺の境内寺内の様子から堂内に鎮座まします諸仏相手に酒を汲み語らえば、俗人よりはるかにまじだと、泉州堺での浪華生活第一歩の心境を詠んでいる。旭莊の律詩・絶句は、長編の詩とは趣を異にするものがある。旭莊三十歳のときであり、旭莊はここで塾を開き転居して二十日後に『毛詩』の講学を始めている。故郷に妻のまつをおいての單身独居であったが、九月にまつの実家吉木村で長男孝之助が誕生している。この後旭莊は紀州、江戸を周遊し、翌天保八（一八三七）年八月には一度堺に帰るが、九月には日田に帰省している。第一回の一年ほどの堺在住は、旭莊の浪華定住に至ることとはあまり深い意味を持たなかったような印象を受ける。

旭莊の二度目の来阪は、一年余り後の天保九（一八三八）年四月であり、その時詠んだと思われる詩は無いが、第一回とは異なり浪華在住は五年ほどであり、前回よりも詩作の数は多く、先に述べたように中の島仮寓を振り出しに、西横堀舟町橋・呉羽橋東南町橋・高麗橋四軒街・西横堀西国橋など、五回も住居を変えている。五年間常住していたわけではないが、大阪を中心としてその行動半径はかなり広範囲に及んでいることが、『梅墩詩鈔』などによっても分かる。

現在の大阪にも馴染みのある地での作を挙げるならば、天保山・浪華橋（難波橋）・肥後橋などがある。

登天保山 天保山に登る 注③

長しと雖も冗ならず、と。洵に吉甫の詩を知る者なり。吉甫、塵務を擺脫して、仕途に入らず。親しむ所は則ち墨客騷人、好む所は則ち江山風月。宜しく其れ東国詩人の冠と為すべきなり。詩は美にして収むるに勝えず。故に選に入る者甚だ多く、分ちて上下巻と為すと云う。注①

吉甫は旭莊、斎藤謙は斎藤拙堂のこと、以下の拙堂の言葉は『梅墩詩鈔』四編の序に見える。

才気煥発、変幻自在、長編大作の構成の奇異、語句の秀逸さを称する。斎藤拙堂の論評を引用して旭莊の詩を真に知る者と言ひ、仕官の道を選ばず在野にあつて山水自然を愛したと総評し、「東国詩人の冠」の榮譽を与えてゐる。採るべき詩が多すぎて、上下の二巻としたという。この愈越の「東国詩人の冠」という評価が、即旭莊の評価となつてゐる嫌があるのだが、なお再考の余地があるだろう。が愈越の言うように、才気に満ち溢れ、自由奔放な詩の発想、長編大作を得意とする点は、旭莊の最大の特徴として認められる。

さて旭莊の文筆活動に関する詳細については稿を改め論ずることにして、本稿では浪華の旭莊について次に述べることにしたい。

○

天保七(一八三六)年五月、初めて浪華に來た旭莊が、界の医師小林安石(旭莊と同郷、日田豆田の出身)のもとに仮寓し、七月に専修寺に移転した時の詩がある。

至界寓林国手家三句。七月七日、移居専修寺 注②

界に至りて林国手家に寓すること三句、七月七日、居を専修寺に移す

客心安似在郷園 客心 安んぞ郷園に在るに似たり

堪見主翁交誼敦 見るに堪えたり 主翁の交誼敦きを

七日何縁到僧舎 七日 何に縁つてか 僧舎に到り

路の木村氏とは淡路町西御霊入の住まい、四度目の妻長府の清水氏とは淡路町にしばらく住んだ後、伏見町に移転している。

三回の浪華在住の生活のうちでは、第二回の時に三カ所移転はしたが、妻子とともに暮らした三年余りが旭荘の人生で最も満ち足りた日々であったと言えるであろう。

○

広瀬旭荘の浪華における創作活動と生活について述べる前に、旭荘の、主として創作の面、文筆活動に関する概略にふれておくことにする。生涯の三分の二以上を浪華で過ごしたとは言え、その私人及び創作の人生はただ波乱に富むとだけの評価では片づけられないものがある。浪華の生活は三回に分かれるが、それらの時期は旭荘にとつて単に時間の経過ではなく、かなり成功と失敗の浮沈を伴ったそれぞれ独自の時期であった。旭荘のことを語るとき必ず引き合いに出されるものに、中国の『東瀛詩選』がある。それについて紹介し、ささか言及しておきたい。

清末の大儒俞越（曲園、一八二一—一九〇六）の手になる『東瀛詩選』は日本の近世の漢詩集である。岸田吟香により入手した漢詩集をもとに、詩人五四八人、詩約五千三百首を選び、『東瀛詩選』四十卷、補遺四卷を編輯した。旭荘の詩は一七一首収められ、二十三・二十四の二巻を占めるといふ唯一特別の扱いをしている。服部南郭・菅茶山・梁川星巖・六如のような高名な詩人ですら一巻である。数量のうえで最高位であるうえに、旭荘の詩に対して次に挙げるような絶賛に近い評価をしている。

吉甫の詩、才氣横溢、変幻百出し、長編大作は、五花八陣の奇を極め、而して片語單詞も又た雋永にして味わうべし。鉄硯学人斎藤謙称す、其の思いを構うること泉の湧くが若く、潮の瀉ぐが若し。其の口吻を発し、筆端に上るに及んでは、馬の坡を注るが若く、雲の空に翻りて風の葉を巻くが若し。多しと雖も濫ならず、

男児をもうけたにかかわらず相手の過失により離絶している。実際には五人の妻を持ったということになる。

まず旭荘が初めて結婚したのは、先の住居遍歴の時にもふれたように天保元(一八三〇)年十二月、肥前代田の東明館の講学から咸宜園にもどった年であり、相手は筑後の浅田村の足立あき、旭荘は二十四歳であった。翌年から病弱の兄に代わって咸宜園の経営を任されたが、当地の代官の塾への度重なる干渉があり、家庭内もうまく行かず離婚に至る。天保三(一八三二)年五月のことで、わずか一年五ヶ月ほどの結婚生活であった。

が半年後、旭荘二十六歳の十二月に筑後の吉木村の合原まつと再婚する。再婚者同士であったが旭荘にとっては良き妻であり、四年後の天保七(一八三六)年には、長男孝之助をもうける。が当時の旭荘を取り巻く条件は極めて悪く、郷里を出て浪華の泉州堺で塾を開いた頃であった。孝之助は、妻の実家吉木村で生まれている。二年ほど堺で生活した後、旭荘は日田に帰省するが、天保九(一八三八)年四月、再び浪華に来て、第二回目の浪華暮らしをはじめ、中之島の仮住まいから西横堀に移り、月近亭で塾を開き、この時初めて妻まつと長男孝之助を日田から迎えとり同居する。これ以後の三年か四年の年月が旭荘にとって家庭的に最も幸福な時期であり、同時に詩人旭荘の創作が最も傑作を生み出した時期でもあった。

が天保十四(一八四三)年五月、旭荘は浪華を去り江戸に向かう。妻まつと孝之助は一旦日田に戻っていたが、江戸に新居を構えた旭荘のもとに母子は赴くも、江戸到着直後に発病し六ヶ月の闘病生活のうえ死去する。弘化元(一八四四)年十二月、旭荘三十八歳の時のことで、結婚十二年目であった。

翌年に正式ではないが信濃向関の平野氏を納れ、男児忠をもうけるが三年ほどで離絶し、忠もわずか五歳で死んでいる。その翌年、嘉永二(一八四九)年に姫路の木村氏を三度目の妻に迎えて淡路町の住居とともに暮らしていたが、性格的なことが原因で二年余り後に離婚する。この間日田に帰省していた旭荘は、帰阪の途次に長府で清水氏を四度目の妻とする。これが最後の結婚であった。

第一回の泉州堺では、妻子を日田においての単身生活、第二回の時は妻まつ及び長子孝之助を呼び寄せており、家族が住んだのは呉羽橋、高麗橋、西横堀西国橋の三カ所の住まいであった。第三回の時は三度目の妻である姫

外)を淡窓の養子とした。そして日田からの帰路、正式としては最後の四度目の結婚をしている。日田から播磨・備前・備中・備後、山陰道の美作・出雲などを回遊して、浪華に帰り、安政元(一八五四)年十二月に、淡路町から伏見町に移り、庭に九本の桂樹があったことから、「九桂草堂」と名づけた。安政三(一八五六)年には『梅墩詩鈔』の続編である四編が刊行される。この当時は長子の孝之助(林外)を伴って遊行しており、四(一八五七)年に『九桂草堂隨筆』完成時とともにこの浪華伏見町の「九桂草堂」に住んでいた。その後林外を伴って日田に帰省し、一年余り隠棲の生活を送るが、文久二(一八六二)年に浪華にもどり中之島の松島藩邸に身を寄せ、翌三年が旭莊の最後の年だが、大阪城のお城入り儒者を健康上の理由で辞退し、北摂の池田に転居するが、七十日余りで死去する。

旭莊の第三回目の浪華暮らしは弘化三年に始まるが、豊後府内藩の蔵屋敷・淡路町御霊西入・伏見町・松山藩邸・池田とほぼ七年の間に五回移り変わっている。

第一回の泉州堺では一年ほどの間に三回、第二回は五年の間に五回、江戸から帰阪後の第三回は十七年の間に五回を数える。中で最も長く住んでいたのは第三回の時の淡路町御霊で八年ほどであるが、この時期は旭莊の創作活動の分岐点でもあった。浪華に在住すること通算二十二年あまり、その間の転居が十三回、この数字は広瀬旭莊の人生がいかに波乱に富むものであったかを自ずから知らしむるものではなからうか。

### ○旭莊の結婚

次に兄淡窓と旭莊の二つの相違点として挙げた、両者の結婚について述べる。

兄淡窓が七十五年の生涯の間に伴侶としたのは、文化七(一八一〇)年、二十九歳の時に結婚した合原なな一人であった。それに対して弟旭莊は、五十七歳の人生で正式な結婚を四度、うち死別したのは一度だけで、二度離婚をしている。また二度目に結婚した妻が亡くなった翌年に、正式では無い関係を三年ほど持った女性がいたが、

堀舟町橋東詰に住居を移し、その住まいを月近亭と名づけて塾を開くが、十二月に呉羽橋東南町東北に転居し、翌十一(一八四〇)年三月に高麗橋四軒町、八月に西横堀西国橋に移転している。その後日田に帰省、肥前の藩主の招聘による講学などの後、一旦浪華に戻るが十四(一八四三)年五月に、浪華を去り江戸に移る。この時旭荘は三十七歳になっていた。

泉州堺では一年足らず、第二回の浪華暮らしは五年間にわたり、中之島・西横堀舟町橋・呉羽橋東南町・高麗橋四軒町・西横堀西国橋と転々と住居を変えている。最後の二回の移転には、塾生と近隣の住民また家主とのトラブルが原因のようで、旭荘の塾が繁栄し塾生が増加するにつれて、世間との関わりの中での塾の経営は障害が多かったらしい。旭荘が塾を開いたあたりは今もそうだが江戸時代の末も商都浪華の中心地であり、町民相手の教育の場所として適してはいるものの、環境は快適とはい難かったのではなからうか。

以上が旭荘が浪華の地と関わりを持った前半の住居歴である。泉州堺以来を数えれば、住まいを変えること八回に及んでいる。

江戸に移った旭荘は仕官を志すと同時に自ら塾を経営するが、莫大な借金を作り、長子孝之助を生んだ二度目の妻とも死別し、人生最大の不運に見舞われる。失意の旭荘は日田には帰らず、再び浪華の地に舞い戻ってくる。弘化三(一八四六)年八月、四十歳のときのことであった。江戸での生活は通算三年である。これより以後文久三(一八六三)年に五十七歳で没する日まで、日田に帰省したり、山陰・山陽道・北陸道を旅することはあっても、浪華を定住の地とした。

弘化三年からの第三回目の浪華の住まいは、まず二ヶ月あまり豊後府内藩の蔵屋敷に仮寓の後に、十一月に移転した淡路町御霊西入(津村北坊)から始まり、『十八史略』を講じ、塾生は初めは六人であったという。翌嘉永元(一八四八)年に、詩集の『梅墩詩鈔』初編・二編・三編が刊行される。二(一八四九)年六月には三度目の結婚をするが、二年後の四(一八五二)年八月に性格上の原因から離婚する。当時旭荘は日田に帰省していたが、文政六(一八二三)年以来兄淡窓の養子となっていたのを解消し、旭荘と二度目の妻との間に生まれた孝之助(林

関することを挙げるならば、住居と結婚がある。

この二つについては、旭荘の日記『日刊瑣事備忘』『九桂草堂隨筆』及び詩集の『梅墩詩鈔』などにより、それぞれの時期の旭荘の状況について知ることができる。

旭荘が浪華で生活したのは前後二十三年ほどあるが、この通算二十三年間は三期に分けることができる。そして三回の浪華生活の間に十回以上の転居をしている。転居の理由については明らかかなものもあるが、故郷の日田に帰省、また地方に一時身を置いた後、再び浪華に戻った時などの物理的な事情によるものもある。がやはり異郷の地、浪華だけで十回を越える転宅は普通ではない印象を受ける。兄淡窓が生地の日田を離れることなく所に終生住み続けたのに比較すればその思いは一層強くなり、転宅マニアかとの疑問を抱かせる。そこでまず旭荘の大阪での住まいの軌跡をたどっておきたい。

天保元（一八三〇）年、肥前の代田の東明館で教授していた旭荘は帰郷して、兄淡窓の講学塾「咸宜園」にもどり、初めての結婚をする。翌年兄の代行となるが、塾の教育に対する代官の厳しい弾圧が始まり、また翌三年には離婚をする。この頃から『日刊瑣事備忘』を書き始めるが、年末には再婚する。十年ほど後にこの女性が病死するまでともに暮らし、娘や息子を持つが、結局は息子だけが残り娘も妻も失う結果となる。再婚後二三年の間九州一帯を周遊して、六（一八三五）年、日田に戻ると、代官の江戸召還により、対立関係は自然解消になったが、この事件が旭荘に与えた精神的打撃が故郷日田出奔の直接の動機となったと言われている。

天保七（一八三六）年五月、三十歳の旭荘が初めて浪華の地に足をおろしたのは、泉州堺の医師小林安石宅であったが、仮住まいで、二ヶ月後に専修寺に移り『毛詩』の講義を始めたが、年末には甲斐町に移転している。この年の九月に、先に述べた息子の長男孝之助（林外、後に淡窓の養子となる）が生まれている。堺での一年足らずの歳月は旭荘の意に合わず、江戸その他を旅遊し日田に帰省している。これが旭荘の初めての浪華住居である。

天保九（一八三八）年、三十二歳の時再び浪華に出てきた旭荘は、四月に中之島に仮住まいをし、六月に西横

反対の道を兩人が歩むことができたのであろう。片や銭儲けの道とすれば、片や銭失いの道なのだから。

兄淡窓は広瀬家の長男、旭荘は五男であったが、父の世代と同じく長男の淡窓は家督を継がず、次男の九兵衛が広瀬家を相続し、兄弟たちの経済的庇護者を務めている。旭荘は十七歳から四十五歳の時まで、生来病弱で子供の無かった兄淡窓の養子になっていた。旭荘が養子縁組を解かれたのは、旭荘の長男、孝之助(林外)が淡窓の養子となったからである。父子二代にわたって淡窓の養子となったが、この時孝之助は十五歳であった。

この両者の最も大きな違いは、兄淡窓は近隣の地を周遊した以外は、終生生地の日田を離れることが無かったのに対して、弟旭荘は五十七歳の生涯の半ば以上を江戸特に大阪で過ごし、二十代のころから四国・九州・関東・近畿・山陰・山陽・北陸などの各地を遍歴周遊した放浪漂泊の人であった。ただし交友関係の広さと知名度は兄淡窓も旭荘に勝るものがあり、「咸宜園」の塾主、儒者また詩人文人としての名声の高さにより諸方から交誼を求められることが多かったためであろう。

七十五歳の生涯を日田に住み続けた淡窓、日本全国の広領域を放浪し、遂に異郷の地浪華、大阪で没した旭荘。残された功業はいずれも偉大であるが、両者の差異は余りにも大きいものがある。淡窓についての後人の研究は多いが、旭荘についてはまだ始まったばかりといえよう。全国各地に広がるその足跡の広さが、困難にしている一因であろう。この小論は旭荘が最も長く住んだ大阪、浪華の地での旭荘の生活、その一端を述べて、旭荘の生涯の全貌説明のための一助としたい。

### ○浪華の住居

兄淡窓と弟旭荘との対照的な相違は種々の面において如実にあらわれている。その中で旭荘の浪華での生活に



## 広瀬旭荘 生涯と作品

——浪華大阪の地——

西村 富美子

広瀬旭荘、旭荘は号である。初めは秋村、ついで旭荘、後に梅墩と号した。名は謙また謙吉、字は吉甫という。光格天皇の文化四（一八〇七）年五月十七日に大分県日田の豆田町魚町で生まれ、文久三（一八六三）年八月十七日、大阪の北摂の地池田で没した。享年五十七歳。旭荘の墓は現在大阪市天王寺区の統国寺（旧邦福寺）にあり、大阪市立天王寺美術館の北東に隣接し、茶臼山の傍に位置する。

旭荘は広瀬淡窓の末弟であるが、後世に於ける知名度の点では遙かに兄淡窓の方が弟旭荘を越えるものがある。が、この二十五歳という親子ほど年齢差のあった二人の才能は、全く対照的であり、甲乙つけがたいものがある。両極端ともいえる二人の差は、外貌また性格、ライフスタイルひいてはその生涯の軌跡にまで及んでいる。

兄弟は、当時の日田の豪商、広瀬宗家の家に生まれ育った。日田が当時財政的に豊かな土地であるうえに、家の富裕な環境は、淡窓、旭荘の二人が学問に専念し詩文を生業とする生活を可能にさせた大きな源泉、要因であろう。その家庭環境について簡単に述べておこなうならば、兄弟の父は三郎兵衛、俳人であり俳号を桃秋、母は名をゆいという。なお父三郎兵衛は広瀬家の長男ではなく、次男であり、長男の平八は三郎兵衛以上に学問好きで、国・漢の両分野にわたって学業を修め、中で特に俳書を愛好通覧し、三十五歳のときに遂に家督を弟の三郎兵衛に譲り、秋風庵を建て俳号を秋風庵月化と称した。このような伯父月化、父桃秋のもとなればこそ、商賈とは正